

日本における「ヘンゼルとグレーテル」の受容について
—大正期を中心に—

Reception of 'Hansel and Gretel' in Japan:
Focusing on the Taisho Era

小泉直美

KOIZUMI Naomi

要旨

大正期の「ヘンゼルとグレーテル」は先行研究では13話とされていたが、今回の調査の結果、新たに5話見つかかり、18話存在していることが確認できた。大正初期の邦訳はドイツ語対訳が主流で忠実に訳されており、ドイツ語の需要が多かったことがうかがわれる。また大正期には、絵本やグリム童話の単行本が出版されるようになり、数多くの児童雑誌が創刊された。そのなかには、題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく、「お菓子の家」に変えられ、チョコレートやビスケットなどの原典にはない食べ物が出現するものがある。大正期は明治期から始まった西洋菓子産業が発展した時代である。子どもの読み物に流行りの食べ物が取り入れられ、家鴨を擬人化して会話する場面が入れられ、子ども向きに改変される。これらは童心主義を掲げる大正デモクラシーの影響であろう。お菓子の家という非現実の世界に焦点を当てることによって、子捨てや魔女殺害や宝石略奪などの場面から目を逸らそうとしたのである。原典が持つ暗い側面から目を背けて、子どもたちを夢の世界に誘導する話にしようとしたところに、大正期の童心主義のコンセプトが読み取れる。

Abstract

According to studies, there were 13 translations of 'Hansel and Gretel' in the Taisho era (1912–1926). This study discovered five more, thus confirming the existence of 18 translations. The translations in the early Taisho era were mostly bilingual (German–Japanese) and they were faithfully translated. This trend suggests that there was a great demand for German, and picture books and *Grimm's Fairy Tales* were published and many children's magazines were launched. In some of them, the title was changed to 'The House of Sweets', and foods that were not found in the original, such as chocolate and biscuits, appeared. This adaptation could be attributed to the development of the Western confectionery industry in the Taisho era. Popular foods and scenes depicting conversations with an anthropomorphic duck were introduced into children's books. It could indicate the influence of the Taisho Democracy's advocacy of 'doshinshugi'.

In other words, from the dark depictions of abandoned children, witch killings, and theft, in the original tale, children's attention was diverted to the imaginary world of 'The House of Sweets'. In this, the concept of the Taisho era's 'doshinshugi' is evident.

Key Words

ヘンゼルとグレーテル、グリム童話、日本での受容、大正期、お菓子の家

Hansel and Gretel, Grimm's Fairy Tales, Reception in Japan, Taisho-era, House of Sweets

1. はじめに

「ヘンゼルとグレーテル」の最初の邦訳は、1901(明治34)年の東海生訳「一太郎とおすみ」(『日本之小學教師』所収)である。明治期最後の邦訳は、1911(明治44)年に発表された日野蕨村訳「グレーテルとヘンゼル」(『獨逸お伽噺』所収)であり、合計10話存在することが判明している¹。大正期の邦訳は先行研究では13話とされていたが、調査の結果、18話存在することが判明した。新たに発見した5話のなかには「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」という題名が3話存在する。この題名は明治期にはなく、大正期になって初めて出現するものである。本稿では、まず、18話の邦訳文の特徴と改変点、邦訳者あるいは編者について論述する。次に「お菓子の家」という題名が出現することから、大正期の菓子産業の発展と児童文化との関わりについて考察する。

2. グリム童話 KHM 15 「ヘンゼルとグレーテル」のあらすじ(決定版)

大きな森のはずれに貧乏な樵、妻、ヘンゼル、グレーテルの4人が住んでいる。あるとき飢饉が起こり、食べ物に困り、後妻である継母は子どもたちを捨てることを提案する。渋る父親を説き伏せて、子捨てが実行される。1回目の子捨てでは、白い小石で2人は無事帰宅する。2回目の子捨てではヘンゼルはパン屑を撒くが、森の小鳥たちに食べられてしまい2人は森で迷う。3日目の昼頃、綺麗な雪のように白い小鳥が現れて、2人をパンの家へと導く。そこには魔女がいて、2人を家の中に招き入れ、「牛乳、砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみ」で歓待する。翌日、ヘンゼルは檻に入れられ、グレーテルは労働をさせられる。4週間経過後、魔女はヘンゼルを食べることにする。彼女はグレーテルも食べようとするが、グレーテルの機転で、逆に魔女がパン焼き竈の中で焼き殺されてしまう。2人は魔女の家にあった真珠と宝石を持ち帰る。途中大きな川があり、白い鴨が泳いでいる。グレーテルは鴨に助けてもらうように頼む。ヘンゼルは先に鴨に乗りグレーテルも乗るよう促すが、グレーテルは重すぎるので、ひとりずつ渡してもらうことを提案する。2人が無事帰宅すると、継母は死亡していて、父親だけになっている。3人は奪った宝物で幸せに暮らす。

3. 大正期における「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳

1) 邦訳の概観

大正期の邦訳は18話存在する。先行研究では13話であるが、調査の結果、新たに5話存在することが判明した。それは下記一覧の⑥少年通俗教育會編「魔法婆」、⑦少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」、⑩葉多黙太郎訳「お菓子の家」、⑰蘆谷蘆村著「お菓子の家」、⑱畑小鳥著「オクワシノイへ」である。⑥⑱は三康図書館、⑦⑩⑰は大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵である。大正期の邦訳については特筆すべき点が2つある。1つ目は大正初期にドイツ語対訳が3話あることである。これはドイツ語の需要が多かったことを意味する。2つ目はルートヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-1860)の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳が出現することである。それは下記3.2)の項、⑫今井ただし訳「ヘンセルとグレーテル」である。この訳文については3.4)の項で詳述する。

2) 邦訳一覧

- ①1914(大正3)年10月 田中樞吉訳「ヘンゼルとグレーテル」『グリムムの童話』南山堂書店
- ②1914(大正3)年10月 小笠原昌齋訳「ヘンゼルとグレーテル」『グリムお伽噺講義』上巻 精華書院
- ③1914(大正3)年11月 年岡長汀訳「ヘンゼルとグレーテル」『獨和對譯グリム十五童話』南江堂書店
- ④1915(大正4)年10月 藤沢衛彦訳「ヘンゼルとグレーテル」『通俗グリム童話物語』通俗教育普及會

- ⑤1916(大正 5)年 5 月 中島孤島訳「ヘンゼルとグレーテル」『グリム御伽噺』富山房
- ⑥1916(大正 5)年 6 月 少年通俗教育會編「魔法婆」『幼年百譚お話の庫春の巻』博文館
- ⑦1919(大正 8)年 7 月 少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」『グリム物語』(世界童話第 2 集)博文館
- ⑧1919(大正 8)年 10 月 内藤豊一訳「Hans to Grete」『グリムお伽噺』日本のローマ字社
- ⑨1920(大正 9)年 7 月 巖谷小波編/武田比佐画「キコリノコドモ」『名作お伽噺グリム』富田文陽堂
- ⑩1921(大正 10)年 12 月 三宅房子訳「林へ子を捨てに」『金の船』3(12) キンノツノ社
- ⑪1924(大正 13)年 6 月 葉多黙太郎訳「お菓子の家」『グリム童話集』崇文館書店
- ⑫1924(大正 13)年 7 月 今井ただし訳「ヘンゼルとグレーテル」『童話』5(7)コドモ社
- ⑬1924(大正 13)年 8 月 金田鬼一訳「ヘンゼルとグレーテル」『世界童話大系第 2 巻獨逸篇グリム童話集』世界童話大系刊行會
- ⑭1924(大正 13)年 10 月 金の星社編輯部編「ヘンゼルとグレーテル」『グリム童話』(世界少年少女名著大系 10)金の星社
- ⑮1925(大正 14)年 5 月 馬場直美訳「森の家」『通俗泰西文藝名作集』帝國講學會
- ⑯1925(大正 14)年 8 月 童話研究會編「林の棄兒」『グリム名著選』博文館
- ⑰1926(大正 15)年 5 月 蘆谷蘆村著「お菓子の家」『お母様の童話』文化生活研究会
- ⑱1926(大正 15)年 11 月 畑小鳥著「オクワシノイへ」『カナグリームオトギ』富文館
- (太字表示は調査の結果、筆者が新たに発見した邦訳)

3) 大正期 18 話の邦訳内容と邦訳者(編者)について

(1) 田中樞吉訳「ヘンゼルとグレーテル」(1914)

1 番目の邦訳は 1914(大正 3)年に出版された①田中樞吉訳「ヘンゼルとグレーテル」である。ドイツ語対訳で原典に忠実な邦訳といえる。原典では母親は第 3 版までは実母であったが、第 4 版から継母に変えられ、それが決定版まで維持される。田中訳では継母が子捨てを提案する。子どもたちは 2 回目の子捨てで迷子になりパンの家を見つけて魔女に歓待される。魔女については、原典では第 6 版から魔女の容貌が詳しく描かれその内容が決定版まで維持される。ここでは決定版の内容がそのまま訳出されている。2 人が無事帰宅すると父親のみが出迎える。最後の結末句は第 5 版から加筆されるが、田中訳では結末句がそのまま訳出されている。明治期には結末句は東海生のみが訳出しており²、翻訳では省略されることが多い。大正期において田中以外に結末句を訳出しているのは、②小笠原、③年岡、⑤中島、⑧内藤、⑬金田である。明治期に比べると大正期は原典に忠実に訳されていることがわかる。

第 7 版(決定版)の「ヘンゼルとグレーテル」は第 6 版を踏襲しており、第 6 版は一般に出回っていないので³、田中はグリム童話の決定版を底本として使用したものと思われる。ただし魔女は妖婆と訳され、妖婆が子どもたちを歓待する料理は、「お砂糖を添えた牛乳、焼菓子、りんご、くるみ」とあるが、原典では„Milch und Pfannekuchen mit Zucker, Apfel und Nüsse“(牛乳、砂糖をまぶしたパンケーキ、りんご、くるみ)なので⁴、砂糖は牛乳ではなく、焼き菓子を修飾するものと捉えるべきであろう。田中はドイツ語に堪能であるが、この点のみ文法的な間違いをしているのである。

田中樞吉(1883-1975)は東京帝国大学を卒業した大正期及び昭和期のドイツ文学者である。ドイツに留学し、フランス、イギリス、アメリカを外遊している⁵。京城帝國大学、愛知大学、中央大学の教授を歴任した人物である。

(2) 小笠原昌齋訳「ヘンゼルとグレーテル」(1914)

2 番目の邦訳は 1914(大正 3)年に出版された②小笠原昌齋訳「ヘンゼルとグレーテル」である。ドイツ語対訳で①田中訳同様、原典に忠実な邦訳である。ただし魔女は魔法使いと訳され、魔法使いが子どもたちを歓待する料理は「牛乳、砂糖入りの揚げ菓子、りんご、くるみ」である。①田中訳と比較すると、小笠原の方が正確な訳であるといえる。

小笠原昌齋(生没年不明)は、1904(明治 37)年に東京外国語学校(現東京外国語大学)獨語学科を卒業する。本籍は山梨県で、卒業後は獨逸学協会学校(現獨協中学校・高等学校)のドイツ語教員となる⁶。その後東京外国語大学の教授となり、教授時代に小笠原稔と改名する⁷。

(3) 年岡長汀訳「ヘンゼルとグレーテル」(1914)

3 番目の邦訳は、1914(大正 3)年に出版された③年岡長汀訳「ヘンゼルとグレーテル」である。ドイツ語対訳で①田中訳、②小笠原訳同様に原典に忠実な訳である。ただし魔女は妖婆と訳されている。特筆すべきは、妖婆が歓待する料理が原典のとおり「牛乳、砂糖のついたパンケーキ、りんご、くるみ」と訳されていることである。明治期以降、„Pfannekuchen“を「パンケーキ」と訳しているのは、年岡が初めてである。1912(大正元)年発行の独和辞典では「薄焼き菓子、煎餅、紅梅焼きの類」⁸とある。①田中や②小笠原は、当時の独和辞典に準じて訳しているが、年岡は「パンケーキ」と訳しているので外国をよく知る人物といえる。しかし彼の訳にも原典と異なる点がある。鴨に救助を依頼するのが原典ではグレーテルであるのに、ヘンゼルになっている点である。兄の妹に対する配慮を意図した可能性も否定できないが、ドイツ語対訳の本であり、訳者の主観が入ることは考えにくい。ドイツ語に堪能な年岡ではあるが、最初に川に橋がないので渡れないと言うのはヘンゼルであるので、そのまま彼の言葉として訳してしまった可能性が高い。

年岡長汀は筆名であり、実名は年岡鷹市(生没年不明)である。これまで年岡は文学士ということのみ判明していたが、調査の結果、本籍が岡山県で 1911(明治 44)年 7 月に京都帝国大学文学科獨文学専攻を卒業していることが判明した⁹。学生時代には京都文学会発行の『藝文』において、上田敏とともに学会役員として名を連ねている¹⁰。

(4) 藤沢衛彦訳「ヘンゼルとグレーテル」(1915)

4 番目の邦訳は、1915(大正 4)年に出版された④藤沢衛彦訳の「ヘンゼルとグレーテル」である。原典にほぼ忠実な邦訳である。ただし藤沢も魔女を妖婆と訳し、妖婆が歓待する料理を「牛乳、お砂糖のついたパンケーキ、りんご、くるみ」と訳している。また鴨に救助を依頼するのは本来グレーテルであるが、藤沢訳でもヘンゼルであり、原典と異なる点まで③年岡訳と同じであることから、明らかに③年岡訳を踏襲したものであることがわかる。③年岡訳と異なるところは、結末句が訳出されていないことくらいである。おそらくこれは、藤沢が省略したのであろう。

藤沢衛彦(1885-1967)は明治大学を卒業し、民俗学者で明治大学教授である。日本伝説学会を設立し、日本児童文学者協会の会長を歴任した人物である。

(5) 中島孤島訳「ヘンゼルとグレート」(1916)

5 番目の邦訳は、1916(大正 5)年に出版された⑤中島孤島訳の「ヘンゼルとグレート」である。内容は原典にほぼ忠実である。彼は大正期では初めて Hexe(witch)を魔女(まぢょ)と訳している。特徴と

しては、ヘンゼルとグレーテルがパンの家を見つけて食べているときに、魔女の「チッピー、タップ、チッピー、タップ、戸を叩くのはそりや誰だ？」という台詞があることだ。この台詞は、エドワード・ヘンリー・ウェナート (Edward Henry Wehnert 1813-1868) の‘Hansel and Grethel’¹¹ における“Tip-tap, tip-tap, who raps at my door?”(48)と同じ表現である。また中島訳には、魔女が「窯の中で焼けて灰になつて」という表現がある。この表現はグリム童話の原典には存在しない。ウェナート版には“witch to burn to ashes”(49)とある。おそらく中島はウェナート版から訳したのであろう。さらに中島訳では、魔女は子どもたちの寝顔を見て「椋鳥が又二つ来たよ」と言う。この表現は原典にもウェナート版にも存在しない。椋鳥という表現は、国語辞典によると「江戸の町に出て来た田舎者。またその人をあざけっていう語」、「特に、冬季、信越地方などの雪国から江戸に出て来た出かせぎ者」¹²とある。椋鳥は、2人が魔女にとって嘲りの対象であることを示すために中島が付加したものと推測する。

中島孤島の実名は中島茂一(1878-1946)で、本籍は長野県であり、1899(明治 32)年に東京専門学校(現早稲田大学)の文学科を卒業している¹³。小説家、評論家、翻訳家である。早稲田大学の名簿には、1915(大正 4)年に早稲田大学出版部で編集員を務めていた記録がある¹⁴。

(6) 少年通俗教育會編「魔法婆」(1916)

6番目の邦訳は、1916(大正 5)年に出版された⑥少年通俗教育會編「魔法婆」である。この話は改作されている。子どもたちの名前は太郎とお花で、和名である。2人はみなしごで、実の親子関係ではない樵の家で養育されている。明治期以降、子どもたちが養父母に育てられるのはこの話が最初である。子捨てを提案するのは樵の妻である。2人は捨てられ、お菓子の家を見つける。その家は「パン、カステーラ、ビスケット」でできている。「カステーラ」「ビスケット」は明治期以降初めて出現するものである。2人が無事帰宅すると、樵の妻は死亡しており、奪った宝物で子どもたちは気立てのよい樵と仲睦まじく暮らす。

『お話の庫』の前書きには、主に新井弘城が執筆をしたと書かれている。新井弘城は南部新一(1894-1986)が博文館に勤務していた頃の筆名である。南部は京都府舞鶴市に生まれ、立命館中学校を中退しており、編集者、作家、児童文学研究者である。戦後に児童文学者として活躍するときの筆名は南部ひろくに亘国である¹⁵。彼は博文館に1915(大正 4)年に入館し、1928(昭和 3)年に退館する¹⁶。

(7) 少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」(1919)

7番目の邦訳は、1919(大正 8)年に出版された⑦少年通俗教育會編「林の中へ捨てられた兄妹」である。内容はほぼ原典に忠実である。ただしこの話も⑤中島訳と同様に、ヘンゼルとグレーテルがパンの家を見つけて食べているときに魔女の「チッピー、タップ、チッピー、タップ」という台詞や、子どもたちを見て「椋鳥が来た」という台詞がある。また魔女が焼死して灰になると書かれており、歓待する料理も同じである。したがって、⑤中島訳を踏襲したものと思われる。⑤中島訳と異なっている箇所は、形容詞を多く使っていることである。たとえば魔女が子どもたちを歓待する料理では「濃い牛乳、香ばしいお煎餅、甘い砂糖、赤いりんご、脂のあるくるみ」というように食べ物の前に原典にも中島訳にもない形容詞が付加されている。また子どもたちが魔女の家から帰宅するときに救助するのは家鴨である。その家鴨が「さあへ、お乗りよお二人さん、船の代りになつてあげやう」と言う。家鴨が擬人化されているのである。さらに⑤中島訳とは異なり、結末句は訳出されていない。

この話は少年通俗教育會が編者であり、訳者については不明である。

(8) 内藤豊一訳「Hans to Grete」(1919)

8 番目の邦訳は、1919(大正 8)年に出版された⑧内藤豊一訳「Hans to Grete」である。ローマ字表記で、原典にほぼ忠実な邦訳である。

内藤豊一は筆名であり、実名は内藤好文(1895-1978)であることが判明した。彼は本籍が岡山県で、1920(大正 9)年に東京帝國大学医学部を卒業し、附属病院の助手や国立感化院の院医として勤務していた。その後東京帝國大學文学部独文科に再入学し、1929(昭和 4)年に卒業する。神戸大学や関西大学の教授を歴任し¹⁷、親和女子大学から名誉教授の称号が授与されたドイツ文学者である。内藤豊一という名前は、医師もしくは医学生のときに使用したものである。

(9) 巖谷小波編「キコリノコドモ」(1920)

9 番目の邦訳は、1920(大正 9)年に出版された⑨巖谷小波編「キコリノコドモ」である。この話は、父親が 1 人で山へ子どもを捨てに行き、こっそりと逃げ帰る。母親については書かれていない。子捨ては 1 回のみで簡潔にまとめられている。⑥少年通俗教育會編に続き、「パンの家」ではなく「お菓子の家」と表現されており、色鮮やかな家が描かれている。この話は『名作お伽画噺グリム』に収録されており、武田比佐が絵を描いた「ヘンゼルとグレーテル」の最初の絵本といえるものである。

巖谷小波の実名は、巖谷季雄(1870-1933)である。獨逸学協會学校の第 1 期生であり、1889(明治 22)年に普通科を卒業するが、医学の道を放棄し文学を志すため 1889(明治 22)年に獨逸学協會学校の専修科を退学する。小波は明治期から昭和期にかけて活躍した著名な児童文学者である。

(10) 三宅房子訳「林へ子を捨てに」(1921)

10 番目の邦訳は、1921(大正 10)年に出版された⑩三宅房子訳「林へ子を捨てに」である。内容は原典にほぼ忠実である。子どもたちの名前はヘンゼルとグレーテルである。2 人がパンの家を見つけて食べているときに「チップー、タップ、チップー、タップ」という魔女の台詞があり、魔女が焼死して灰になると書かれている。この表現は⑤中島訳と⑦少年通俗教育會編と同じものである。しかし三宅は「椋鳥が来た」という表現を付加することなく、結末句も訳出していない。

三宅房子の実名は齋藤佐次郎(1893-1983)である¹⁸。男性が女性の名前を筆名に使っているのである。彼は 1916(大正 5)年に早稲田大学文学科英文学科を卒業し¹⁹、雑誌『金の船』の創始者で、編集者、翻訳家である。後にこの雑誌は『金の星』に改題され、出版社も金の星社となり、現在も子どもの本の出版社として存在している。

(11) 葉多黙太郎訳「お菓子の家」(1924)

11 番目の邦訳は、1924(大正 13)年に出版された⑪葉多黙太郎訳「お菓子の家」である。話の内容はあまり改変されていないが、表現が少し変えられている。子どもたちの名前はヘンゼルとグレイチルである。魔女は「牛乳、チョコレート、りんご」で 2 人を歓待する。魔女が 2 人に提供する食べ物でチョコレートが出現するのは葉多訳が初めてである。チョコレートは原典には出現しない食べ物である。題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」というのも葉多訳が初めてのものである。また子どもたちが魔女の家から帰宅するときに救助するのは家鴨である。家鴨は「何だつて、そんな六ヶ敷い^{むっかしょ}顔をしてなさる？」と子どもたちに話しかける。⑦少年通俗教育會編同様に、家鴨が擬人化されているのである。

葉多黙太郎は筆名と思われるが、実名は不明である。

(12) 今井ただし訳「ヘンゼルとグレーテル」(1924)

12番目の邦訳は、1924(大正13)年に出版された⑫今井ただし訳「ヘンゼルとグレーテル」である。この話はベヒシュタイン版の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳である。川戸道昭と榊原貴教の文献では、グリム版の「ヘンゼルとグレーテル」として紹介されているが²⁰、話の内容はグリム版ではない。

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein)はドイツの作家である。彼は1845年に『ドイツ昔話の本』(*Deutsches Märchenbuch*)を出版しており、それはグリム童話集を上回る読者数を獲得したといわれている²¹。今井訳がベヒシュタイン版であることは3.4)で後述する。

今井正(1903-1996)は1928(昭和3)年に早稲田大学法学部獨法科を卒業後、獨逸大使館に勤務する。『早稲田大学校友会会員名簿』には「獨逸大使館通譯官」であることが記載されている²²。大学卒業後すぐに獨逸大使館に勤務しているので、ドイツ語が堪能な人物であったことがわかる²³。

(13) 金田鬼一訳「ヘンゼルとグレーテル」(1924)

13番目の邦訳は、1924(大正13)年に出版された⑬金田鬼一訳「ヘンゼルとグレーテル」である。原典に忠実な邦訳である。魔女が子どもたちを歓待する料理は「牛乳、お砂糖のかかっている卵焼きのお菓子、りんご、くるみ」である。「お砂糖のかかっている卵焼きのお菓子」という表現は、子どもたちに理解できるようにしたものと思われる。

金田鬼一(1886-1963)は、東京帝国大学文学部独文科を卒業し、第四高等学校、学習院大学の教授を歴任している。ドイツ文学者であり、翻訳家である。彼はこの話が収録されている『世界童話大系』において日本で初めてグリム童話集を原典から全訳している²⁴。

(14) 金の星社編集部編「ヘンゼルとグレットル」(1924)

14番目の邦訳は、1924(大正13)年に出版された⑭金の星社編集部編「ヘンゼルとグレットル」である。話の内容は変わらないが、加筆されている箇所がある。継母について「二人の子供を可愛がりませんでした」という表現があり、継母の印象をさらに悪くしている。パンの家には桃の実の階段が出現する。桃の実は初めて出現する食べ物である。この話は10月に出版されているので、秋の季語である桃を使っているのかもしれない。魔女が2人を歓待する料理は「お饅頭、リンゴタート、クリーム」である。1906(明治39)年に食通といわれた村井弦斎が著した『食道楽』に「林檎ターツ」の解説がある²⁵。その解説によると、リンゴターツは現在のアップルパイとよく似た食べ物のようである。1915(大正4)年発行の英和辞典には「tart(タート)は果実を含めるパイ」とある²⁶。またこの当時クリームと名の付く食べ物には、アイスクリーム、シュークリーム、チョコレートクリームがある。いずれも日本で製造販売されていたものである。この話は、略奪した宝物よりも「月夜の晩に、道傍で赤く光ってゐる白い小石の方が、よつぼど美しいと思つてみました」²⁷と子どもたちが思う場面で終わる。この文章は原典にはない。おそらく貨幣価値に左右されない子どもの純粹さを強調したのであろう。

金の星社編集部の代表者としては、齋藤佐次郎の名前が明記されているが、1924(大正13)年1月号の『金の星』には金の星社の社員名が掲載されており、そこには野口雨情の実名である野口英吉(1882-1945)、達崎龍一(1904-1979)、山野虎市(1881-1925)などが名を連ねている。1924(大正13)年秋には、『金の星』の投稿者であり、後に児童文学者となる久米元一(1902-1979)が入社している²⁸。主としてこの4人が齋藤佐次郎とともに編集に携わっていたと思われる。

(15) 馬場直美訳「森の家」(1925)

15 番目の邦訳は、1925(大正 14)年に出版された⑩馬場直美訳「森の家」である。話の内容は変わらないが、表現の異なる箇所がある。子捨てを提案する継母について「ひどいことを言うのは本当の母親ではないから」という表現が加筆され、継母を悪者視する見解が挿入されている。

馬場直美(1883-没年不明)は男性で、福島県出身の新聞記者である²⁹。1905(明治 38)年 5 月に萬朝報社に入り政経部編輯部長を経て、1924(大正 13)年に中外商業新報社に入り、1929(昭和 4)年 9 月に退社した人物である³⁰。

(16) 童話研究会編「林の棄兒」(1925)

16 番目の邦訳は、1925(大正 14)年に出版された⑩童話研究会編「林の棄兒」である。話の内容は変わらないが、表現の異なる箇所がある。たとえば貧乏の度合いについて「夏冬の着物一枚さへ新調できない」や子どもたちには「木の皮を食べさせられない」という表現がある。これらの言葉は原典に存在しない。とくに木の皮を食べるという行為は、日本では実際に飢饉のときに松の皮を食べていたという事実があり³¹、厳しい現実を具体的に描いているといえる。

編者の童話研究会について調査をしたが、どのような人物が存在するのか不明である。この話が収録されている『グリム名著選』の前書きには「石本正三氏が編集に協力した」とある。南部新一書簡集に石本正三の三男である石本清夫の手紙があることから³²、石本正三は児童文学に関わっている人物であると推測する。

(17) 蘆谷蘆村著「お菓子の家」(1926)

17 番目の邦訳は、1926(大正 15)年に出版された⑩蘆谷蘆村著「お菓子の家」である。この話は改作されており、ヘンゼルとグレーテルが道に迷っている場面から始まる。白い鳥ではなく、赤い鳥が 2 人を導きお菓子の家を見つける。その家は「屋根がきれいなお煎餅、柱がぷかぷかしたパン、軒がぴかぴかするチョコレート、窓が透き通った氷砂糖」である。ここでもチョコレートが出現する。2 人が家を食べっていると鬼ばあが現れ、その容貌は「黄色い顔、尖った鼻、大きな眼鏡、せむし、怖い顔」とあり、原典にはない言葉が加筆されている。その後鬼ばあは焼死し、2 人が宝物を略奪して帰宅すると、父親は喜んで出迎える。母親についての記述はない。あとがきで蘆谷はお菓子の家の 1 節だけがお伽噺として効果があるので、継子いじめの部分を削除し、お菓子の家の部分だけを採用してこの話を作り直したと解説している。この話が『お母様の童話』に収録されていることから、読者である母親に対する配慮から改変したものと思われる。

蘆谷蘆村の実名は蘆谷重常(1886-1946)である。島根県に生まれ国民英学会および聖書学院に学んだ³³。彼は口演童話の研究家で、1922(大正 11)年には日本童話協会を創立し、敬虔なキリスト教徒でもあった。キリスト教は神から授かった命を大切にする教えである。そのため子どもを捨てる行為は、蘆谷にとって許されないものであったのであろう。

(18) 畑小鳥著「オクワシノイへ」(1926)

18 番目の邦訳は、1926(大正 15)年に出版された⑩畑小鳥訳「オクワシノイへ」である。話の内容は変えられていないが、表現の異なる箇所がある。子どもの名前は「一ロウとハナコ」で和名である。父親は樵ではなく、「キヲキルコトヲ ショウバイトシテ」とあり、飢饉ではなく「ヒドイ アラシデ

オコメガ トレナイ」とあり、略奪する宝物は真珠や宝石ではなく「タカラ ヤ オカネ」と表現されている。また魔女の家から帰宅するときに救助するのは家鴨である。その家鴨は「ナニヲ シンパイ シテ キナサル」と子どもたちに聞く。⑦少年通俗教育會編、⑩葉多訳と同じように、家鴨が擬人化されている。カタカナ表記で、数字のみ漢字で書かれており、カタカナを学ぶ低学年の子どもたちが理解できる表現に直された本である。

畑小鳥は筆名であると思われるが、実名は不明である。

4) ベヒシュタイン童話の邦訳について

(1) 今井ただし訳「ヘンゼルとグレーテル」

大正期にはグリム童話だけでなく、ベヒシュタイン童話の「ヘンゼルとグレーテル」も日本語に訳されている。それが⑫今井訳である。先行研究では⑫今井訳はグリム版とされているが、そうではない。ここではグリム版とベヒシュタイン版の相違点を提示して、⑫今井訳がベヒシュタイン版であることを証明する。とくに後半部分に明確な違いがあるので、その部分を引用して比較する。さらに、魔女の容貌についての詳細な描写は、グリム童話では第6版から加筆される。第7版(決定版)の「ヘンゼルとグレーテル」は第6版を踏襲しているので、ここでは第7版のテキストを使用することにする。

(2) 魔女の詳細な容貌

グリム版においては第6版から魔女の詳細な容貌が加筆される。その箇所を引用したものが下記である。

【グリム版(決定版)】

Die Hexen haben rote Augen und können nicht weit sehen, aber sie haben eine feine Witterung, wie die Tiere, und merken's, wenn Menschen heran kommen. (101)

魔女は赤い目をしていて、遠目が利かず、獣のように嗅覚が発達していて、人間が近付くと嗅ぎ分けることができる(拙訳)

【ベヒシュタイン版】

trat ein steinaltes, krummgebücktes, triefäugiges Mütterchen heraus von nicht geringer Häßlichkeit, Gesicht und Stirne voll Runzeln und in mitten eine große, große Nase. Hatte auch grasgrüne Augen. (45)³⁴

すごく高齢で、腰が曲がり、ただれ目をした小さな老婆が出てきた。顔も額も皺だらけでとても醜く、真ん中に大きな大きな鼻があった。おまけに目は草色だった(拙訳)

【今井ただし訳】

大へん年とつた腰の曲つた、たゞれ眼のお婆さんが出て來ました。その顔ときたらそれはそれは厭らしい、皺くちやで、まん中に大きな大きな鼻がふらさがり、まるで草のやうに青い眼をしてゐる。(87)³⁵

(3) 魔女の宝物を子どもたちが持ち帰る場面

グレーテルが魔女を焼死させ、ヘンゼルを小屋から出した後、2人はキスしあう。そして2人は魔

女の家にあった真珠や宝石を持ち帰る。その持ち帰る場面の描写が下記である。

【グリム版(決定版)】

Und weil sie sich nicht mehr zu fürchten brauchten, so gingen sie in das Haus der Hexe hinein, da standen in allen Ecken Kasten mit Perlen und Edelsteinen. >>Die sind noch besser als Kieselsteine<< sagte Hänsel und steckte in seine Taschen was hinein wollte, und Gretel sagte >>Ich will auch etwas mit nach Haus bringen<< und füllte sich sein Schürzchen voll. (103)

そしてもう恐れることがなくなったので、2人は魔女の家の中に入ると、部屋の四角に真珠や宝石の入った箱があった。「これは小石よりもいい」とヘンゼルは言い、ポケットに詰め込めるだけ詰め込んだ。グレーテルも「私も何か家に持って帰ろう」と言って、エプロンにいっぱい詰め込んだ。(拙訳)

【ベヒシュタイン版】

Und da war das weiße Vöglein wieder da, und auch viele viele andre Waldvöglein, die flogen auf das Kuchendach des Häusleins, darauf war ein Nest, und daraus nahm jedes Vöglein ein buntes Steinchen oder eine Perle, und trugen sie hin zu den Kindern, und Gretel hielt sein Schürzchen auf, daß es alle die vielen Steinchen fasse. (46)

するとそこに白い小鳥が再びやって来て、たくさんの森の小鳥たちもケーキでできている家の屋根に飛んで来た。そこには鳥の巣があり、小鳥は1羽ずつ色とりどりの小さな石や真珠をくわえて2人に運んできた。グレーテルはエプロンを広げて、たくさんの小さな石を入れた。(拙訳)

【今井ただし訳】

そのとき白い小鳥が澤山の仲間をつれて、またこゝへ飛んで来ました。そしてこの森の小鳥たちはカステラで出来てゐる小屋の屋根の上を舞ひ飛んでゐましたが、やがて一羽一羽自分の巣にかへつて、綺麗な小石や真珠を一つづつ子供達の所へくはえて来ました。グレーテルは自分の前垂を擴げて、その數知れぬ寶石をもらひました。(89)

(4) 子どもたちが帰宅したときの在宅者

魔女の家から子どもたちが無事帰宅すると、グリム版では母親は死亡しており、父親のみが在宅している。両親の状況を表した場面が下記である。

【グリム版(決定版)】

Der Mann hatte keine frohe Stunde gehabt, seitdem er die Kinder im Walde gelassen hatte, die Frau aber war gestorben. (108)

樵は子どもたちを森に置き去りにしてからというもの楽しいと思うことはなかった。一方、妻はすでに亡くなっていた。(拙訳)

【ベヒシュタイン版】

Der alte Holzhauer und seine Frau saßen traurig und still in dem engen Stüblein und hatten großen Kummer um die Kinder (47)

年取った樵と彼の妻は狭い小さな部屋に静かに悲しげに座っていて、子どもたちのことを考え

るととても心配だった。(拙訳)

【今井ただし訳】

その時年とつた木樵夫婦はさびしく狭い小屋の中に坐つて、すてゝしまつた子供たちのことを心配してゐました。(89)

(5) 比較の結果

上記の比較により、今井訳はグリム版ではなく明らかにベヒシュタイン版であり、内容も原典に忠実な邦訳である。なお、ベヒシュタイン童話「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳は、今井ただし訳が日本で最初のものである。

4. 18話のまとめ

1) 18話の概要

大正期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳にはドイツ文学者が名を連ねており、ドイツ語原典からの忠実な邦訳が5話(①田中訳②小笠原訳③年岡訳⑧内藤訳⑬金田訳)存在する。④藤沢訳は③年岡訳を踏襲しているためドイツ語からの邦訳は18話中6話ということになる。このうち3話(①田中訳②小笠原訳③年岡訳)はドイツ語対訳であり、ドイツ語の需要が多かったことを示している。英語訳からの邦訳は、3話(⑤中島訳⑦少年通俗教育會編⑩三宅訳)存在し、ほぼ忠実に訳されている。話の内容は変わることなく、表現が異なるものは6話(⑨巖谷編⑪葉多訳⑭金の星社編集部⑮馬場訳⑯童話研究会編⑰畑訳)で、改作されているものは2話(⑥少年通俗教育會編⑱蘆谷)存在する。特筆すべきはベヒシュタインの「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳が1話(⑫今井訳)存在することである。大正期になって、外国の様々な出版物が手に入りやすくなったことがわかる。またヘンゼルとグレーテルが川を渡るときに、救助する鳥と会話するよう改変された話が3話(⑦少年通俗教育會編⑪葉多訳⑱畑)も出現する。明治期には1話(暁影生訳)しか存在しないが³⁶、大正期には3話に増える。継母が子捨てを提案し魔女が焼死するという残酷さをそのまま伝えているが、同時に擬人化した動物を挿入し子どもたちを楽しませているのである。また大正期には数多くの児童雑誌が創刊され、子ども向けのグリム童話の単行本が出版される。題名が「ヘンゼルとグレーテル」ではなく「お菓子の家」に変えられたり、魔女が歓待する食べ物に「ビスケット」「カステラ」「チョコレート」「クリーム」「リンゴタート」などの西洋菓子が出現したりする。大正期は西洋菓子産業が発展した時代である。子ども向けの読み物のなかに都市部で流行りの菓子を出現させているのである。残酷な行為から目を逸らし、ファンタジーの世界に子どもたちの目を向けさせるためであろうか。「ヘンゼルとグレーテル」の絵本が初めて出現するのも大正期である。「キコリノコドモ」という題名で『名作お伽画噺グリム』に収録されている。そこではお菓子の家が色鮮やかに描かれている【図1】。



【図1】武田比佐画「キコリノコドモ」

一方、⑯童話研究会編「林の棄兒」に出現する「木の皮を食べさせられない」という表現、⑱畑小鳥著「オクワシノイへ」に出現する「お米が採れない」という表現、略奪する物が「お金」という表現などは、当時の日本の貧しい世相を読者に伝えようとしていると解釈できる。1918(大正7)年に米騒

動が起きた頃には、米価高騰で捨て子が増加し、貧しい家の子どもは家計を助けるために労働し、「もらい子」となって働く子どもがいた³⁷。都市部の華やかな生活の裏では、過酷な生活を強いられた貧しい農村部の子どもたちが存在したのである。

2) 改変された菓子について

(1) 改変点の概要

18話の邦訳文と訳者や編者について詳述したなかで、菓子の出現について改変されている箇所が目につく。まず題名が「ヘンゼルとグレーテル」から「お菓子の家」(⑩葉多訳)に改変されている。これは明治期にはなく、大正期に初めて出現する題名である。改変された英語訳からの影響も考えられるが、ここでは話に出現する菓子、とくに大正期に発展した西洋菓子に焦点をあてて考察していく。

(2) チョコレート

⑩葉多訳「お菓子の家」で魔女が子どもたちを歓待する食べ物は「牛乳、チョコレート、りんご」である。チョコレートは初めて出現するものである。そもそもチョコレートを日本で最初に食したのは岩倉使節団で、それは1873(明治6)年のことであるといわれている³⁸。1878(明治11)年に五代目風月堂から暖簾分けをされた米津松造が日本で初めてチョコレートの製造を手掛けたが、高価で味も日本人の口に合わなかったようである。その後2度渡米経験のある森永太郎が、1899(明治32)年に森永西洋菓子製造所(現森永製菓)を創業する。森永製菓の発展はめざましく、1918(大正7)年に日本で初めてカカオを原料としてチョコレートの一貫製造に成功し、広く一般に供給する体制を整えるのである。その時のチョコレートは15銭で発売され、翌年には低価格化が実現して10銭で発売された³⁹。1919(大正8)年の食べ物の価格はそば一杯が7銭、豆腐が4銭であったことを考えると⁴⁰、チョコレートは庶民にとっては高価な菓子であったといえる。

⑰蘆谷に出現するお菓子の家は、「きれいなお煎餅、透き通った氷砂糖、ふかふかしたパン、ぴかぴかするチョコレート」できている。とくに蘆谷は子捨てのエピソードを削除しており、題名も「お菓子の家」に改変している。菓子を強調し流行りのチョコレートを出現させて、子どもにとって魅力的な話に改変したのである。

(3) ビスケットとカステラについて

⑥少年通俗教育會編「魔法婆」では、子どもたちが見つけるお菓子の家は、「パン、カステラ、ビスケット」できている。ビスケットは、前述した米津松造が1875(明治8)年に製造販売を開始して、1877(明治10)年に第1回内国勸業博覧会に出品している⁴¹。さらに彼は1880(明治13)年にイギリスからビスケットの製造機械を購入している⁴²。1914(大正3)年には東京府主宰の東京大正博覧会が上野公園で開かれたが、その時の出品では羊羹、カステラ、金平糖に次いでビスケットが多くを占めた。この博覧会は134日にわたり開催され、約747万人の入場者があったという⁴³。1916(大正5)年に出版された「魔法婆」に出現するビスケットは、流行りの菓子を取り入れたものといえよう。カステラは1900(明治33)年に文明堂が開業し広めているが、ビスケットが一般に普及されるのは、1923(大正12)年に森永製菓が製造販売した「マリービスケット」からであると思われる。

(4) 菓子産業と子ども向け読み物との関わり

森永製菓は1923(大正12)年9月1日に起きた関東大震災の翌日に、社長と専務が直接指示してビ

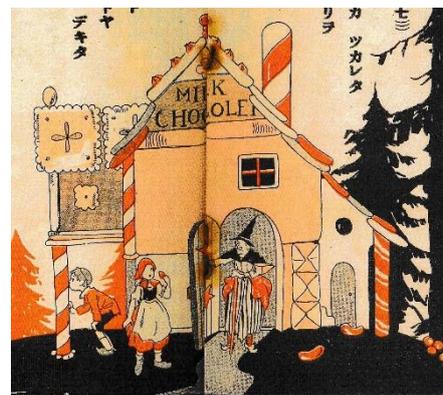
スケットとミルクキャラメル6万袋をトラックで運ばせて、芝公園と日比谷公園で無料配布した。震災翌々日の9月3日からはミルクの配給を行い、人びとは長蛇の列を作ったという。さらに9月7日の東京日日新聞には、「森永ミルクを差し上げます」という広告を出している⁴⁴。震災の混乱期のなかで、森永製菓のこのような偉業が西洋菓子の浸透を早めたと考えられる。

大正期の「ヘンゼルとグレーテル」には、子どもたちがお菓子(パン)の家を食べている場面の挿絵が4話(⑤中島訳⑨巖谷編⑩三宅訳⑫今井訳)存在する。お菓子でできた家は、子どもたちの目には魅力的に映ったに違いない。挿絵から菓子の普及につながったのではないだろうか。やがて昭和期になると「ヘンゼルとグレーテル」の話は、菓子の宣伝として使われるようになる。大正期に発売された菓子の名称である「ミルクチョコレート」が絵本『オクワシノイへ』に描かれ【図2】⁴⁵、森永ビスケット「チョコイス」が幼年雑誌においてお菓子の家の屋根として使われるのである⁴⁶。菓子産業と子ども向け読み物との関わりが見てとれるのである。

5. 西條八十「お菓子の家」

大正期は児童雑誌が数多く創刊された時代である。1919(大正8)年10月に刊行された『赤い鳥』には、西條八十(1892-1970)の「お菓子の家」という童謡が収録されている。その童謡は森に住む魔女のパンの家を意識したものと思われる。下記が西條の童謡である。

山のおくの谿あひに きれいなお菓子の家がある。
 門の柱は飴ん棒、屋根の瓦はチョコレート、
 左右の壁は麥落雁、踏む舗石がビスケット、
 あつく黄ろい鎧戸も おせば零れるカステイラ、
 静かに午をしらせるは 金平糖の角時計。
 誰の家やら知らねども 月の夜更けにおとづれて、
 門の扉におぼろげな 二行の文字を読みゆけば。—
 「こゝにとまつてよいものは ふたおやのないこどもだけ」⁴⁷



【図2】長谷川露二画『オクワシノイへ』

この童謡にもいろいろな菓子が出現する。ビスケット、カステイラ、金平糖は、1914(大正3)年に行われた東京大正博覧会で出品されたものであり、チョコレートはすでに森永製菓で一般向けに製造販売されていたものである。西條は、後にこの童謡について「いかにこの世の風が荒く冷たく当たろうとも、可憐な孤児たちのためには、必ず見えぬ何処かに温かい愛護の家を造って待っている。これは淋しい運命を持った児等への慰藉のうたである」と述べている⁴⁸。本来の「ヘンゼルとグレーテル」は、飢餓で親が子どもを捨てて、子どもたちがパンの家にとどり着く話だが、西條はふた親のない子どもを受け入れる養護施設として紹介している。子捨てには触れず、子どもを食べる魔女が作ったものであるとも書かず、流行りのお菓子のみを出現させているのである。苦難にあっても手を差し伸べてくれる人がいて、希望ある未来が待っていることを子どもたちに教えているのである。彼は子捨てや魔女が存在する怖い現実を見せることなく、子どもに夢のみを与える話として「ヘンゼルとグレーテル」を利用したのである。話の全文は『金の船』と『童話』には収録されているが、『赤い鳥』には収録されていない。『赤い鳥』は「中産階級の子弟を主たる読者とし、上品でハイカラなイメージを売り物に」⁴⁹していた。それゆえ魔女殺害や宝石略奪が存在する「ヘンゼルとグレーテル」は、『赤い鳥』が唱える「純真無垢な存在である」子どものイメージを損なうために、子どもに夢を与える「お

菓子の家」を取り上げて歌にした童謡のみが収録されたのではないだろうか。

6. おわりに

大正期は明治期からの近代化が発展し、都市部では子ども服の需要が本格化し子ども用自転車が発売されるなど⁵⁰、生活が豊かになり大人と異なる「子ども」という存在が認識された時代である。児童雑誌の表紙においても、流行りの服を着た華やかな子どもが描かれている。同時に、貧困のために子どもを手放さなければならない人びとも存在した時代である。「ヘンゼルとグレーテル」に似た境遇の子どもたちが、まだ現実に数多く存在したのである。大正末期には、児童文学は「『新興童話連盟』(大正 14 年)による若い世代やプロレタリア児童文学の道にすすんだ人びとによって批判され、児童文学の社会性が追及されるように」なる⁵¹。それに呼応するかのように、改変された大正期の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳は、流行りの菓子が出現する夢のある華やかさと、樹皮を食べるような厳しい現実の両方を表現したものになっている。大正期の訳者は、子どもの人権を認めて理想化し、「お菓子」に焦点を当てて、消費者としての子どもに夢を与えようとした。その一方では、原典に忠実に訳すことによって、西洋昔話に描かれた貧しい庶民の現実を伝えようとした。明治期には 10 話であった邦訳が、大正期になると 18 話も出現するのは、「ヘンゼルとグレーテル」が大正期という時代に合致した話であったからだといえる。

お菓子に焦点を当ててこの話の受容を調べることにより、「童心主義」の一端を垣間見ることができた。流行りの菓子を取り入れ、お菓子の家の挿絵を挿入することにより、残酷な場面から子どもたちの目を逸らせてファンタジーの世界へと子どもたちを誘導しているのである。昭和期には、この傾向がどのように発展するのか、それを見極めていくのが今後の課題である。

注

- 1 拙稿「明治期におけるグリム童話 KHM15『ヘンゼルとグレーテル』の受容について—『一太郎とおすみ』の訳者東海生に焦点をあてて—」『梅花児童文学』(27) 梅花女子大学大学院児童文学会 2019 年 6 月 51-52 頁。
- 2 東海生訳「一太郎とおすみ」『日本之小學教師』3(33) 國民教育社 1901 年 9 月 30 頁。
- 3 第 6 版は現在でも入手困難であり、ギーゼン(Gießen)大学にのみ所蔵されている。そのため一部の研究者のみが許可を得て原書のコピーを保有している。
- 4 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd.1. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam 1980, S. 105. 以後原典の引用はページ数のみ()内に表記する。
- 5 田中梅吉『祖稿グリム童話全集』東京堂 1949 年 11 月 奥付。
- 6 『東京外国語学校一覽 明治 37 年-明治 38 年』東京外国語学校 1905 年 11 月 94 頁。
- 7 野中正孝『東京外国語学校史』不二出版 2008 年 11 月 388、1116 頁。
- 8 保志虎吉編『大正獨和辞典』三省堂書店 1912 年 9 月 926 頁。
- 9 京都帝國大學編『京都帝國大学卒業生名簿』京都帝國大學 1936 年 7 月 315 頁。
- 10 金尾種次郎編『藝文』1(9) 金尾文淵堂 1910 年 12 月 京都文學會役員名簿。
- 11 Wehnert, Edward: *Household Stories. Collected by the Brothers Grimm*. Newly translated. (illust.) London: Routledge 1861. 原典の引用はページ数のみ()内に表記する。
- 12 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』12 巻 小学館 第 2 版 2001 年 12 月 921 頁。
- 13 田中唯一郎編『早稲田大學校友會會員名簿 大正 4 年 11 月調』早稲田大學校友會 1915 年 12 月 145 頁。
- 14 同上。
- 15 大久保久雄「博文館編集者南部亘国さんと蔵書のこと」名著普及会編『名著サプリメント』3(10) 名著普及会 1990 年 8 月 29 頁。

- 16 同上書 28 頁。
- 17 『人事興信録』人事興信所 23 版 1966 年 5 月 「な之部」14 頁。
- 18 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』柏書房 2018 年 8 月 57 頁。
- 19 『早稲田大学校友会会員名簿 昭和 10 年用』早稲田大学校友会 1934 年 12 月 322 頁。
- 20 川戸道昭/榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧』4 巻 大空社 2005 年 9 月 580-581 頁。
- 21 高木昌史編著『決定版グリム童話事典』三弥井書店 2017 年 4 月 303 頁。
- 22 『早稲田大学校友会会員名簿 昭和 10 年用』前掲書 83 頁。
- 23 今井正の翻訳としては『日本誌 日本の歴史と紀行』(1973)がある。これはドイツ人医師であるエンゲルベルト・ケンペル(Engelbelt Kämpfer 1651-1716)が執筆した江戸時代の日本での見聞録を訳したものである。
- 24 鈴木重貞「明治大正時代におけるグリム童話の翻訳家たち」日本児童文学学会編『グリム童話研究』大日本図書 1989 年 10 月 114 頁。
- 25 村井弦斎『食道樂續篇 夏の巻』報知社出版部 1906 年 9 月 310-311 頁。
- 26 井上十吉『井上英和大辞典』井上辞典刊行會 1915 年 9 月 2011 頁。
- 27 3.2)邦訳一覧⑭ 160-161 頁。
- 28 斎藤佐次郎『斎藤佐次郎・児童文学史』金の星社 1996 年 5 月 645 頁。
- 29 永代静雄編『昭和新聞名家録』新聞研究所 1930 年 12 月 41 頁。
- 30 永代静雄編『日本新聞年鑑大正 14 年』新聞研究所 1925 年 8 月 6 頁。
- 31 高嶋雄三郎『松』法政大学出版局 1975 年 10 月 174 頁。
- 32 『南部新一書簡リスト』4 頁。大阪国際児童文学振興財団 www.iiclo.or.jp (閲覧日 2021 年 10 月 15 日)。
- 33 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』1 巻 大日本図書 1993 年 10 月 33 頁。
- 34 Bechstein, Ludwig: *Deutsches Märchenbuch*. California: Createspace 2013, S. 42-47. 引用はページ数のみ()内に表記する。
- 35 3.2)邦訳一覧⑫ 引用はページ数のみ()内に表記する。
- 36 曉影生訳「鬼婆退治」『家庭雑誌』1(4) 家庭雑誌社 1908 年 8 月 74 頁。
- 37 下川耿史編『近代子ども史年表 明治・大正編』河出書房新社 2002 年 1 月 326、334 頁。
- 38 岡田哲『たべもの起源事典日本編』筑摩書房 2013 年 5 月 456 頁。
- 39 竹内書店新社編集部編『超ロングセラー大図鑑』竹内書店新社 2001 年 9 月 83、87 頁。
- 40 文教政策研究会編『日本の物価と風俗 130 年のうつり変わり 明治元年～平成 7 年』文教政策研究会 1996 年 12 月 580、584 頁。
- 41 江後迪子『洋菓子事始め』神戸風月堂 2002 年 8 月 77 頁。
- 42 「東京風月堂社史」編纂委員会編『東京風月堂社史』東京風月堂 2005 年 4 月 45 頁。
- 43 江後迪子 前掲書。
- 44 森永製菓編『森永製菓 100 年史』森永製菓 2000 年 8 月 89 頁。
- 45 主婦之友社編輯局著/長谷川露二画『オクワシノイへ』主婦之友社 1935 年 6 月。
- 46 立原えりか文/谷俊彦絵/牧野圭一写真構成「おかしのおいえ」『たのしい幼稚園』17(9) 講談社 1961 年 12 月 6 頁。
- 47 西條八十「お菓子の家」『赤い鳥』3(4) 赤い鳥社 1919 年 10 月 48-49 頁。
- 48 西條八十『西條八十全集』6 巻 国書刊行会 1992 年 4 月 328 頁。
- 49 河原和枝『子ども観の近代』中央公論新社 2007 年 11 月 128 頁。
- 50 下川耿史編『明治・大正 家庭史年表』河出書房新社 2000 年 3 月 451、460 頁。
- 51 滑川道夫他編『作品による日本児童文学史』1 巻 牧書店 1968 年 12 月 176 頁。
- 【図 1】 3.2)邦訳一覧⑨に同じ。大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。
- 【図 2】 注 45 に同じ。1935(昭和 10)年の作による。大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。